

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

人間は肉体によって^aティギされるものではなく、肉体を持っているからといって圧倒的に人間らしいわけではない。たとえ義足や義手を持っていても、十分に魅力的な人間は数多く存在する。ゆえに、人間の肉体を持つことは、圧倒的に人間らしいということではもはやなくなった。

肉体を持つことが最も人間らしいということでないなら、精神の方に人間らしさを見出すことになる。脳活動のどこかが、最も人間らしいことになる。

脳活動は様々である。例えば、意識を持つとか感情を持つとか、思考するというように。こうした脳活動のいくつかはすでにコンピュータに実装され、それまでは人間らしい脳の活動とされてきたことも、次々にコンピュータに打ち負かされている。例えば、チェスはすでにコンピュータの方が強い。将棋もプロ棋士レベルでなければ、コンピュータに勝つことができない。人々がテレビで楽しむクイズも、今やコンピュータの方が人間よりも早く正確に答えることができる。

こういった、

A

で、今もなお人間らしいと思えるものをあえて一つ選ぶなら、私は「信じる」ということを選ぶ。少々極端に表現すれば、人間はただ信じ合うことで社会を構成し、その中で生きているということだと思う。

人間は日常生活で様々な人と関わるが、人と関わっていると信じているだけで、本当にその人が人間かどうかは確かめれない。近い将来、アンドロイドが街中で仕事をするようになれば、いつしか人間の中に、かなり多くのアンドロイドが入り交じるかもしれない。

また人間は、人間と関わりながら「心」や「意識」といったものがあると信じている。しかし、実際に脳のどの部分がまさにその機能を担っているかは、明確になっていない。また、自分を内省してそれが何であるか、説明することもできない。

しかし、他人を見ていると、まさに「心」や「意識」なるものを持ち合わせているかのように思える。そうして、みんなが互いに互いを^bカンサツして、同じように「心」や「意識」を感じて、^①それゆえに自分を含めた人間全体が、「心」や「意識」を持つと

まさに「信じている」。

人間がもう一つ「信じている」ことがある。それは自分の体のことだ。人間の体は無数の感覚器と筋肉から成り立っており、人間はそれらから膨大な情報^{ほうたい}を入手するとともに、その超複雑な体^{ちやうくふくざつ}を意図通りに操作している。

しかしながら、実は意図通りに操作しているのではなく、意図通りに操作していると「信じている」にすぎない。脳は、感覚器から得られる情報のすべてを解釈^{かいせき}しているわけではなく、また直接すべての筋肉に指令を出しているわけではない。もしそんな仕組みになっていたら、ものすごく太い首が必要になってしまい、もはや人間の体ではなくなってしまふ。

感覚器からの情報や筋肉への指令の多くは、脊髄^{せきずい}などで処理され、脳からは大まかな指令と、その結果どのように感覚器が動いたかだけが知らされる。例えば歩いているときに、足は地面に接地したり、太ももの皮膚^{ひふ}は互いにこすれあったりして、非常に多くの感覚器が働いている。また同時に、足の多数の筋肉はうまく統率^{とうそつ}されながら動いている。実際にどの筋肉がどのように動いているかまったく説明できないが、ちゃんと足は歩いているのである。そして問題が起らない限り、足は歩いていると脳は信じている。

遠隔操作型アンドロイド^{えんかくさくしやうあんどろいど}は、② そのような自分を「信じる」人間の性質を利用したシステムである。

遠隔操作型アンドロイド、ジェミノイドは次のように操作する。

B

ジェミノイドと操作者のパソコンはインターネットでつながれている。そして、そのパソコンにはジェミノイドの体と、ジェミノイドと対面する訪問者を映し出すモニターの映像が表示されている。操作者は、モニターの映像を見ながら、しゃべったり首を動かして視線を変えたりして、訪問者と対話する。そのとき、操作者の声がインターネットを介してジェミノイドに送られるとともに、パソコンが操作者の声を解析^{かいせき}し、操作者の唇の動きを推定して、その唇の動きもジェミノイドに送信する。

C

パソコンに取り付けられているUSBカメラは、常に操作者の頭部を追跡^{ついせき}しており、その頭部の動きも同時にジェミノイドに送信される。

D

操作者がモニターの映像を見ながらジェミノイドを操作すると、操作者はモニターを通して、ジェミノイドが自分のしゃべった通りに唇を動かしながらしゃべり、また自分が首を動かした通りにジェミノイドの首が動くことを確認^{かくにん}できる。

このように、自分の動きに同調するロボットを操作していると、操作する者はそのロボットを自分の体の一部であるかのように錯覚^{さくかく}する。認知科学^{ちんち}研究において類似^{るいじ}の研究例が多くあるが、それらの研究では、人の腕と同調して動くコンピューター・グラフィックスの腕のように、同調するのは体の一部のみである。一方、このジェミノイドの研究では、それが体全体であっても、ロボットの体を自分の体であるかのように感じることを実証している。例えば、操作者がジェミノイドを操作しながら訪問者と対話していると、訪問者がジェミノイドの体に触ると、操作者はまるで自分の体に触られたかのように感じる。ここで大事なのは、ジェミノイドの体には、センサーは取り付けられていないことである。操作者は、自分の体だと勘違い^{かんちがい}しているジェミノイドが触られるのを視覚的に確認することで、本来ないはずの触覚が反応した気分になるのである。

なぜこのようなことが起こるかは、次のように説明できると考えている。人間の脳と体は必ずしも密につながっておらず、脳は、体が意図通りに動いていれば、その細部の動きには注意を払^{はら}わないで、自分の体をちゃんと動かしていると信じている。

E

、実際の触覚^{しじやかんかく}が届く前に（実際には届かないが）その感覚を予測し、脳としては触覚の反応を無意識にシミュレーションしてしまう。

人間が自分に関して信じているのは、複雑な感覚器や筋肉の動きだけではなく、記憶^{きおく}も同様である。人間の行動を完全に記憶できる脳はない。脳は、その限られた容量のもと、何がしかの③ キジューンで選んだ記憶だけを維持^{いじ}している。

それゆえ、私はどうしてあのような行動をとったのだろうか等と、自分の行動の原因を忘れてしまふことは頻繁^{ひんぱん}に起こる。記憶はどんどん薄れていき、そのとき自分が正しい行動をとったかどうかを後で反省しても、その理由が分からないことが多いのである。また、自分のとった行動そのものも忘れてしまふ。自分が一体何をしたのかわからないというように。

③ そういったときも、自分を信じるしかない。自分は正しい行動をとってきているはずだと信じるしかないのである。

ただこの記憶に関しては、センサーやコンピューター・ネットワークによって、今後は非常に正確な記録を残せる可能性がある。そして、自分の脳よりもコンピューターを信じることになる。

「人を信じる」という言葉があるが、人を信じるということは、単に人の言うことをまるまる信用するということではないだろう。人には、正しい部分と間違った部分^{まちが}が必ずある。またその人の好きな部分もあれば、嫌いな部分もある。

人を信じるということは、人の正しい部分を受け入れ、それを信用することではない。それでは、その人が間違ったときにはその人を信じないということになる。

「人を信じる」というのは、人の可能性、人の本質的な性質を信用することであって、そのときその人が正しい行動をとったかどうかではない。人のたった一つの間違った行動を見て、その人の人格を全否定する人はかなり多い。そう口にするだけで、時間が経てば関係を^あシユウフクできる可能性は高いだろう。しかし一方で、そう口にされると、間違えない人間だけが許されるような気分にもなる。

大事なのは、人には良い面も悪い面もあるということ^{すなお}を素直に受け入れ、常にその人をより深いところで理解しようとする事だ。ただ一方で、人に対する好き嫌いを持つことは、そんなに悪いことでもない。他人に対する好き嫌いは、自分に対する好き嫌いであって、他人に腹を立てるのは自分に腹を立てることもある。他人の気になる行為^{こうい}というのは自分も気にする部分で、そうした部分が少しでも違^{ちが}うと嫌いになる。しかし、そもそもそんなことに^えキヨウミがなければ、そこに好き嫌いは生まれない。

また、他人の気になる部分というのは、自分でも修正しなければならぬと常に気にしている部分であるために、当然気になる。自分でも気になっているから、他人の行為においても気になるのだ。

人徳者とは、他人に対して好き嫌いを言わないように思う。自分の行為に自己責任を持ち、それに対して特段の好き嫌いがなかったり、どんなことでも自分の理想通りに実行できるから、気になる行為がなく、他人に対しても非常に寛容^{かんよう}になれるのではないだろうか。

人徳者と言われなくても、自分が理想とする自分になれている者は、自分の⁴些細なところに注意を向ける必要はなく、様々な⁵よい面悪い面を持つ、様々な他人を受け入れられる。そして、その人間関係を通してより一歩深いところで人とつながるとともに、

人間を、そして自分をより深く知ることができるのだと思う。

もともと、みんなが人徳者になる必要はないしなることもできないが、逆に人の人格を全否定することは、いつかは周りの者すべてを否定し、自分を全否定することにつながる。そうせず、人の可能性を信じて人と関わる^{かか}ようにしたい。人徳者は少ないかもしれないが、完全な悪人はもつと少ないはずだ。

他人のことをどれほど正確に知っているのかと改めて考えれば、ほとんど知らないことに気がつく。自分のことをどれだけ正確に知っているのかと改めて見つめ直せば、ほとんど知らないことに気がつく。それでも我々は社会の一員であり、日々互いに様々に関係し合いながら、助け合いながら生きている。

相手のことを知らないからといって、疑い出せば何も行動できない。関わるということは、その関係において互いに信じ合うということである。たとえその人が悪い人だと噂^{うわさ}されていて、常に警戒^{けいけい}していたとしても、関わりと決めた瞬間^{しゅんかん}はどこかで信じる気持ちが生まれている。

人間が不思議なのは、人間のことも他人のことも、そして自分のことも知らないままに、他人と関わり、社会を構成しているという点である。⁶すなわち、「信じる」ということだけで構成されているのが、この人間社会であるかのようにも思える。

【問1】

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① テイギ

② カンサツ

③ キジュン

④ シユウフク

⑤ キヨウミ

【問2】

A

にあてはまる表現としてもつとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) コンピューターに置き換えられつつある人間の脳活動
- (イ) 以前にはあった人間らしさを失いつつある人間の脳活動
- (ウ) 自分の意識や感情を制御できるようになった人間の脳活動
- (エ) コンピューターと同等の力を持つにいたった人間の脳活動

【問3】

——①「それゆえに自分を含めた人間全体が、『心』や『意識』を持つとまさに『信じている』」とありますが、その具体例としてもつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 自分の中で迷いが生まれたとき、長時間ひとりで座禅を組むことにより、本当の自分に出会うことができると考える。
- (イ) 他人が赤信号で道路を横断しているのを見ると、それが良くない行いだとわかっていながら、自分もしてみたくなる。
- (ウ) 自分が悲しいと思う映画を見ているとき、隣の人も涙を流しているのを見ると、その人は悲しんでいるのだと思う。
- (エ) ボランティア活動に参加することを通じ、それまでわからなかった相手への思いやりの大切さが理解できたと感じる。

【問4】

——②「そのような自分を『信じる』人間の性質を利用したシステム」とありますが、筆者の考えとしてあてはまるものを次の中から一つ選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 人間の脳は、非常に複雑な構造をもった肉体を操作しているので、自分の脳と直結しているジェミニノイドを、操作者は意のままに操ることができる、ということ。
- (イ) 人間の脳は、自らの動きについては大まかな把握をしているので、自分の動作を再現するジェミニノイドを、操作者はまるで自分の体のように感じる、ということ。

【問5】

B

C

D

にあてはまる語の組み合わせとしてもつとも適当なものを選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) B＝つまり C＝そして D＝なぜなら
- (イ) B＝まず C＝しかし D＝なぜなら
- (ウ) B＝つまり C＝また D＝けれども
- (エ) B＝まず C＝また D＝すなわち
- (オ) B＝つまり C＝しかし D＝すなわち

【問6】

E

にあてはまる表現としてもつとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) だから、目で見えた情報の間違いについて脳が正しく考えて
- (イ) しかし、体に触られているのに脳はそのことを感じられず
- (ウ) なぜなら、目で見えていなくても脳は体に触られたととらえ
- (エ) ゆえに、体に触られたことを見るだけで脳は触られたと思い

【問7】

——③「そういったときも、自分を信じるしかない」とありますが、どういうことですか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 人は、自分の行動の結果に確かな自信が持てない場合でも、過去の自分を信頼して進んでいくべきである。
 (イ) 人は、自分の行動の理由を明確に説明することはできないので、自分の感性に従って行動に移すべきである。
 (ウ) 人は、自分のとった行動のすべてを再現することはできないので、今ある現実を受け入れていく必要がある。
 (エ) 人は、自分のとった行動について覚えていなくても、過去に行ったことを自ら認めて反省をする必要がある。

【問8】

——④「些細なところ」、——⑤「よい面悪い面」とありますが、それらとはほぼ同じ意味で用いられる四字熟語をそれぞれ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

- | | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|--------------------------------------|
| (ア) 一朝一夕
<small>いちよういつせき</small> | (イ) 一進一退
<small>いっしんいつたい</small> | (ウ) 一長一短
<small>いちちやういちたん</small> |
| (エ) 枝葉末節
<small>しやうまつせつ</small> | (オ) 竜頭蛇尾
<small>りゅうとうだび</small> | (カ) 針小棒大
<small>しんしやうぼうだい</small> |

【問9】

——⑥「すなわち、『信じる』ということだけで構成されているのが、この人間社会であるかのようにも思える」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 人間というものは、遠隔操作型アンドロイドに対しても、人間が動かしていることを忘れて、本当に感情があるように考えてしまう。そのように「信じる」ことを本能としている人間は、社会生活を営む場合でも、相手と好悪や善悪の感情を共有することを本質としているのではないか、ということ。

- (イ) 人間というものは、だれにでも自分と同じように精神の働きがあると思ひ込み、自分の肉体を脳が思い通りに調節していると思ひ違いをしている。そのように「信じる」ことで生きている人間は、社会生活を営む場合でも、相手

を頼り、相手を認めることを基本としているのではないか、ということ。

- (ウ) 人間というものは、理想的な人徳者になるためには、相手に対してつねにおおらかな態度を保ち続けねばならないと思ひつめている。そのように「信じる」ことを目標にしている人間は、社会生活を営む場合でも、相手の心に少しでも寄りそうことを生きる支えにしているのではないか、ということ。

- (エ) 人間というものは、自分の感覚器の働きを意識することはないが、脳活動によってそれが保たれていることは理解している。そのように「信じる」ことを当然のことと考える人間は、社会生活を営む場合でも、相手との関わり合いにまずは重きを置くことを前提としているのではないか、ということ。

【問10】筆者の意見や考えと合致するものを次の中から2つ選び、(ア) (カ) の記号で答えなさい。

- (ア) 肉体を持っているということが人間とアンドロイドとを区別するための判断材料にならないのならば、「心」を持っているかどうかということ人間とアンドロイドとを区別するしかない。
- (イ) 人間の触感覚と脳とのつながりは必ずしも緻密ではないので、ジェミノイドの操作者は、ジェミノイドが触れられても自分が触れられたと感じる。
- (ウ) 人間の脳は、自分に都合の良いことしか覚えていないという傾向が強く、後で自分の行動を反省しようとしても困難なので、記憶に関しては今後コンピューターに任せたいほうがよい。
- (エ) 人徳者とは、他人の小さなミスなどは気にせず、いつもおおらかな気持ちで他人に接しているが、自分自身に対しては理想的な自分の姿をかけて日夜努力を欠かさないものである。
- (オ) 他人の嫌いな部分は実は自分自身の直したいと思っている部分であることが多いので、自分を成長させるためにも他人の嫌いな部分には積極的に注目するべきである。
- (カ) 人間は、自分の心身のこともよく知らないし、まして他人のすべてを知っているはずもないのだから、知っている部分にこだわらず相互に信頼しあうことが大切である。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

からからからから。

夜の郵便ポスト通りに人影はありません。道の両側では稲の穂が重そうに首をたれ、その向こうにぼつぼつとわらぶき屋根が見えるだけ。朝が早い農家はかりでしたから、家々の灯は、とつくに消えています。

小さな郵便局と赤いポストを過ぎると、あたりはさらに寂しくなってきました。雑木林を騒がす風の音が、たくさんの人の囁き声に聞こえます。

ざわざわざわ。

月の光に白く照らされたすすきの穂は、たくさんの腕が手招きをしているよう。

ゆらゆらゆら。

① 私の胸もざわざわ、ゆらゆら。しんちゃんの前転車の後ろで小さく体をまるめていました。荷台をぎゅつとつかみながら、やっぱり来るんじゃないかと後悔しました。なにしろ鎮守の森のおたま池は、ここに住む子どもたちにとって、それは恐ろしい場所なのです。

人がいなくなつて荒れ果てた神社の中にある、ひっそりとした池です。池のまん中に中洲があり、そこにぼろぼろに古びたほこらが建っています。

ほこらの中には五年前に行方不明になった神主さんがいる。子どもたちはそう噂していました。どういふふうに「いる」のかは謎です。ある子はミイラになっていると言い、別の子はすっかり骸骨になっていると大人から聞いたと言い、雨水を飲み、ムカデを食べてまだ生きていて、誰かがのぞくと「見るな」と大声をあげる、なんていう恐ろしい話もありました。本当のところは誰も知りません。誰もものぞいたことがないのですから。

昼間でも怖いおたま池のことを考えただけで、体がぶるりと震えます。しかもそこへたどりつく前には、もうひとつ、恐ろしい関門が――。

ざわざわざわ。

ゆらゆらゆら。

私の不安をよそに、自転車は夜の中をぐんぐん進みます。自転車に乗れない私は、いまさら一人で帰るわけにもいかない。

自転車に乗れなかった理由のひとつは、激しい運動を禁止されていたため。もうひとつ理由があるとしたら、五歳の時、初めて買った二十インチの補助輪付き自転車が、すでにほかの女の人のところにいた父から届いたプレゼントだったせいかもしれない。私が喜んでそれに乗ると、母が悲しむ気がしたので。

母の話だけを聞くと、父はひどい人ですが、大人になって事情をくわしく知った私の最初の感想は、「どっちもどっち」。私をどちらが引き取るかで、父と母は何年ももていでました。

どっちについていく？ そう聞かれたこともありましたが、でも、八歳の私に答えるというほうが無理です。②その頃の私はそれこそ、自分がどこへ行くかとしていたのかもわからず、人の自転車の後ろに乗っているようなものだったのですから。

からからから。

しばらく進むと左手に桑畑が見えてきます。その先には、子どもたちの夜歩きをはばむ恐ろしい関門。このあたりの墓地です。

桑の葉の間からよきよきと顔を出している卒塔婆（注：墓に立つ細長い板で戒名などが書いてあるもの）や石灯籠が、人の頭に見えました。その頭がみんなこつちを向き、私たちを睨んでいるように思えました。目を閉じてしまいたいのですが、目をつむると、開けた時に目の前に何かが現れそうで、もつと怖い。

「なんだかこわい。誰かがいるみたいだね」

私は口に出して言ってみました。言葉にすれば、少し恐ろしさが薄れる気がして。だけど、しんちゃんの手で、その努力も

③水のあわ。

「うん、いるんだ」

「……………誰が？」

「坂田のおばあ。さつき来る時に見た。おそなえまんじゅうでお手玉してた」

坂田さんのお婆さんはすっかりばけてしまっていて、毎晩ふらふら出歩くから困っている、と坂田のお嫁さんが母の実家のお嫁さんにこぼしているのを聞いたことがあります。でも、坂田のお婆あがいるはずがない。だって――。

「ね、坂田さんとお婆あさんって、先月――」

「ああ、自分が死んだことも忘れちゃってるんだよ」

当時、その土地ではまだ土葬でした。死んだ人は丸いオケのような柩に入れて、そのまま葬るのです。死者が迷い出ないように、盛り土の上に大きな石を置くという土地柄でしたから、④なにがあっても不思議はないのです。

「ほんとに？」

「ほんまだよ」

しんちゃんのギャグはいつも古くて笑えませんが、いまはとくに笑えない。闇のむこうから、坂田のお婆あが歌う数え唄が聞こえてくる気がして、私は自分のこぼしだけを見つめ、指のつけ根にでこぼこができるまで荷台を握りしめました。

墓地を過ぎると、いよいよ鎮守の森。熊笹の中をいつまでもただらだ坂が続きます。しんちゃんは A のようにそり返って自転車をこいでいます。

「だいじょうぶ？ 私、降りようか」

「うざざ」

「後ろで押そうか」

「うしろさるぞ」

しんちゃんは意地になって返事をしません。

「手がもげちゃうよ」

本当にもげそうなんですもの。

坂道をようやく登り切ると、しんちゃんは自転車を停め、道ばたにお尻から座りこみました。酸素不足の B みたいに目をふくらませ、息をはずませて、唇をつき出しました。

「お前、重い」

いまの私だったら、そんなことを言われたら、蹴とばしてやるところですが、八歳の私は嬉しくて、荷台に乗ったまま声ははずましました。

「体重、一キロふえたんだよ」なにしろダイエットなんて言葉もなかった頃のことです。病弱でやせっぽちの私は、学年の標準体重をこえるのが夢でした。「ずっと寝てたからかな」

ずっと寝ていたのは、先週の木曜日のことがあったからです。

C。私は病院に運ばれて、何時間も意識不明のままでした。退院してからも大事をとって、学校を休み続けていたのです。

「お前、もう後ろに乗るな。自分でこげよ」

しんちゃんの自転車で何度か練習したことはあったのですが、まったくだめでした。二十六インチなどいきなり乗れるはずがありません。

「俺、いつまでも乗つけてやれないぞ」

「うん、わかってる」

⑤ わかっていました。

「荷台っていうのは、荷物を置くところで、人を乗せるとこじゃないんだ。父ちゃんがそう言ってた。俺なんか、小学校に上がる前から二十六インチに乗ってたんだぞ」

「練習するよ」

「ホジヨリンなしでだぞ」

「わかった」

「だめだな」

「え、何がだめ」

「返事がだめ。追力足んない。そういう時は、わかったじゃなくて、こう言うんだ」しんちゃんが重大な秘密を打ち明ける顔で言いました。「がつてんしようたくん」

「なにそれ」

「いいから、言ってみ」

「がつてんしようたくん」

「なんか違うな」

「がつてんしようたくん」

五回目くらいでようやくしんちゃんは、うん、まあいいか、とうなずきました。

「俺が教えたなんて誰にも言うなよ。また先生におこられちゃうから。約束だぞ」

「がつてんしようたくん」

私は答え、きつぱりと口をむすびました。クラスの誰かが変な言葉を使うと、先生はしんちゃんを叱るのです。どうせお前が教え

たんだろ、と。かわいそうな、しんちゃん。半分は先生の言うとおりなのですが。

ここからは歩き。鎮守様の石段です。

石段の両側の杉木立に月が隠れて、あたりはいつそう暗くなってしまいました。頭の上の真っ黒な杉の枝が私にのしかろうとしているように見えました。それでなくても昼間でも一人で来るのは怖い場所です。なんとか足が前へ動いたのは隣にしんちゃんがい

たからです。

しんちゃんは余裕たっぷり。らららら。アニメの主題歌を歌っています。坂田のおばあを見ても驚かない、今夜のしんちゃんなら、怖いものなしなのかも知れません。

らららら。

そうでもなさそうです。よく聞くとしんちゃんの歌声は震えていました。⑥ わたしも震える声でいつしよに歌いました。

らららら。

らららら。

ビブラートで合唱。

石段を登りつめた右手、杉木立の向こうに夜空より黒く見えるのが、おたま池です。真っ黒い水面に、空からぽとりと落ちたように月が映っています。

「月見うどんみたいだね」

「うん、でもまずそう」

しんちゃんが自分の言い出したことを後悔している声で言います。緊張のためか、おしっこを我慢している時の顔になっていました。

小島のような中洲に、ほこらの陰気な影が見えます。池は子どもの背丈より深く、ふだんはとでも中洲へは行けないのですが、

この夏の台風で古い杉の木が倒れ、ちょうど橋のようにかかっているのです。

D

杉の木に片足をかけてしんちゃんが言います。

「よし、いくぞ」

「がつてんしようたくん」

「こわくないぞ」

「うん、こわくない」

怖かった。月明かりしかない中で、夜露でつるつるする杉の橋を渡るのも、その向こうに見えるほこらも。

【省略部分の内容】しんちゃんと「私」は、なんとかほこらにたどり着きます。「私」が止めるのも聞かずに、しんちゃんは、ほこらの格子戸をこじ開けました。中には、ひからびた蛾の死骸があっただけでした。しんちゃんと「私」は「なあんだ」と声をあげました。

さつきまで震えていたことなんて、お互いに忘れた顔をして。そして本当に、いつのまにかここが恐ろしい場所であることを忘れていました。しばらく二人で池のほとりでどんぐりを拾ったり、並んで座って裸足になってばしゃばしゃと池の水をかきまわしたりしました。

小石を投げて、水面にいくつ波紋をつくれるかに熱中していたしんちゃんが、波紋が消えるのを見つめながら言います。

「このあいだは、ごめんな」

「え？」驚きました。しんちゃんが誰かにあやまるなんて。

「お前のこと、おぼれさせちゃってさ。俺、泳げないから、つい足にしがみついちやって」

「気にしないよ、ぜんぜん」

「どうだった、死にそうになった時って」

⑦ 私は黙って首をかしげました。うまく答えられなかったのです。どんぐりを数えるのに忙しかったです。

「苦しかった？」

「よく覚えてない。でも、夢の中でお花畑を見た。春の花も、夏の花も、秋の花も、いっぺんに咲いてるお花畑。きれいだったよ」
いつも死の影に怯えていたくせに、あんなふうになにに囲まれて眠り続けていられるものなら、あんがい死ぬのも悪くないかも、なんて八歳の私は思ったものです。

「川がなかった？」

「あ、あった。お花畑の手前に。広い川だよ。でね、橋がかかっているの。牛若丸のお話に出てくるような橋。そこを渡れば、お花畑に行けるのがわかったから、私、そっちへ歩いて行ったんだよ」

「金色でぴかぴか光ってただろ」

「そう、金ぴかの橋……あれ、なんで知ってるの」

「俺も見えたもん。花畑も見えた。すげえきれえだった」

意外なことを言います。ふだんのしんちゃんにとって、おしろい花は落下傘遊びの道具、サルビアの花は蜜を吸うおやつです。

「不思議。同じ夢を見てたんだね」

「おどろきもの木さんしょの木」

「ブリキにタヌキに蓄音機」

しんちゃんがまた石を投げる。今度はひとつしか波紋をつくれませんでした。

「俺、川のこっちにいたんだ。向こうがわにお前が見えたんだよ。でも橋の手前で帰っただろ」

「うん、なんだか急にこわくなって、引き返しはじめたら、目がさめたの」

「やっぱりなあ」しんちゃんが言います。「あの時、俺、お前のこと呼ぼうとしたんだよ。でも、やめた」

⑧ なんと答えていいのか迷ってから、最初に思いついた言葉を口にしました。

「ありがと」

E

。退院して、家に帰ってからです。私と同じ病院に運ばれた時、しんちゃんはもう息をしていなかったそうです。

「呼べばよかったな」

「もう遅いよ」

「なあ、俺、臭い？」

「なんで」

「だって、お前、さつきから、こんな顔してるもん」しんちゃんが給食のピーマンを我慢して食べている時の顔をします。「鼻の穴が細くなってる」

「……別に」

「むりすんなよ。臭いんだろ」

「ちょっとだけ。でも気にならないよ。だって、しんちゃん、いつも臭かったもん」

なくさめるつもりだったのに、しんちゃんはおえって傷ついた顔をして、泥だらけの白い着物のすその匂いをかいています。初めて気づいたように、頭に巻いた三角の布を手にとって、しばらく眺めてから、それで、ぷうとハナをかきました。

私はむりして、鼻の穴を広げてみせました。本当のことを言うと、しんちゃんは臭かった。生きている時よりずっと。あぜ道で見かける干からびたカエルのような臭いがしました。

ずりずり。しんちゃんがお尻を動かして私から体を遠ざけました。

ずりずり。私がむきになって近づくと、またお尻をずらす。

ずりずり。

ずりずり。

「ねえ、どうやって出てきたの」

そう聞くと、しんちゃんはようやくお尻を動かすのをやめて、空を見上げました。むずかしいことを考える時のいつものくせです。

「わかんないんだ、それが。自分でも。生命の神秘だな」

理科の時間に習ったばかりの言葉を使って、鼻の穴をふくらませます。

「でも、生命もうないよ」

「あ、そうか」

「お墓の中って暗いの？」

「うん、暗い。真っ暗い中で、ずっと考えてたんだ。おたま池のほこら、おたま池のほこらって。そしたら、いつのまにか外に出てた。きつとどこかに穴が開いてたんだな。おととい、地震があつたら」

「うん」

「あれのせいかもしれない」

「じゃあ、もし大きな地震があつたら」

「すごいや」

あちこちに穴の開いた墓道を想像しかけたのですが、怖くなってやめました。本当のことを言うと、ずっと怖かったです。さっき、しんちゃんが来た時も、息がとまるかと思つたくらい。しんちゃんだから、平気なふりができたのです。突然やって来たのが、坂田のおばあだつたら、とつくに気絶しています。

⑨ だけど、もう怖くありません。まっすぐ顔を見ることもできます。しんちゃんは前とちつとも変わっていないから。顔の色は冬

の畑の土みたいで、左の耳が何かにかじられたように欠けてしまっているけれど、しんちゃんはしんちゃんです。

「お墓の中ってどんな感じ？」

しんちゃんが首をおおむかせます。こきりと骨の音がして、もとに戻らなくなっていました。

「わたたた」

二人で大あわてで首をもとに戻しました。

「むずかしいことばっかり聞くなよ。首がとれちゃう」

「ごめん」

「あ、あれに似てるかも。押入れの中。俺、父ちゃんに叱られて、よく入れられるんだ。真っ暗でこわいけど、ふとんがつまってるからなんだか気持ちよくて、いつも寝ちゃうんだよ。ま、そういう感じ」

「お腹はすかないの」

「ぜんぜんすかない」食いしん坊のしんちゃんは、初めて寂しそうな顔をしました。

「明日、俺のおそなえまんじゅう持ってきてやるよ」

「いない」

「遠慮すんなって」

「ねえ、一人でさびしくない」

私が聞くと、しんちゃんがまた夜空を見上げます。今度は慎重に、ゆっくり首を動かして。

「お、満月だ」

「おだんごみたいだね」

しばらく二人で月を眺めていました。まんまるいきれいな月でした。それっきり答えを聞くのを忘れてしまいました。しんちゃん

も何も答えませんでした。きっと、答えるのが嫌だったのか、答えるのを忘れてしまったか、どちらかです。

「なあ、明日はどこ行く」

帰り道です。息をはずませて自転車をごきながら、しんちゃんが言います。私はじつとしんちゃんの着物のえりから這い出てきた蛆虫を見ていました。いつもなら悲鳴をあげてしまうところですが、蛆虫がしんちゃんのうなじを上り、耳の穴に入りこもうとするまで眺め続けていました。蛆虫を手でつまんで捨てたのは、あとにも先にも、この時だけです。

⑩ なるべく明るい声で私は言いました。

「コスモスのお花畑を見に行こうよ」

そんなのつまらない、と文句を言うに決まってる。そう思っていたのですが、

「あ、いいね。コスモス」

しんちゃん、お墓の中で、少し性格が変わったみたい。帰りは近道をしました。ちびり坂をいっきに駆けおります。

「ひやつほ」しんちゃんが叫びます。

「ふわあ」私も。

三十年たつたいまでも思います。あれ以上素敵なジェットコースターに乗ったことはないって。ぜったい自転車に乗れるようになるう、怖いのか楽しいのか自分でもわからない悲鳴をあげながら、私はそう決めました。

「自転車、ちゃんと練習しろよ」

「F」

坂の下の曲がり角で、しんちゃんがちぎれるほど手を振っています。月が雲に隠れてあれほど明るかった夜にカーテンが引かれてしまいました。しんちゃんの姿はもう影法師です。

私もいっしょうけんめい手を振り返しました。しんちゃんの右手が心配です。だって本当にちぎれそうだったから。

「もうやめなよ」と言いかけたとき、しんちゃんはくると背中を見せて自転車に乗り、ふいっと曲がり角の向こうに消えました。

追いかけて、後ろ姿を見送ろうかと思ったけれど、やめました。いくらしんちゃんでも、ちびり坂を最後まで自転車で登れるはずがありません。意地っぱりなしんちゃんは、自転車を歩いて押して登るところを、私にはぜったい見られたくないはずだから。

でも追いかければよかった。

あとになって、何度もそう思いました。

次の日、私は母にないしよで、物置にあつたいとこの古い小さな自転車をひっぱり出して、練習をはじめました。誰か後ろを押してくれる人がいれば上達が早いのだろうけど、私には誰もいないから、一人で立つて、またころんで、

乗れるようになったのは、突然。

日暮れ近くでした。倒れそうになるのをけんめいにこらえて、手足をふんばっていたら、急に体のまわりの重力が消え、私と自転車が走りはじめたのです。

そのかわり、体中にすり傷。母からは⑪ 大目玉。

その夜は、ふとんの中でどきどきしながら、坂から下りてくる自転車の音待ちました。

しんちゃんには悪いけど、臭いがわからないように鼻の穴へメンソレータムを塗って。自転車に乗れるようになったといっても、まだ停まり方がわからないから、ぶっつけ本番です。

でも、いつまで待ってもしんちゃんは来ませんでした。だんだん眠くなってきて、まぶたの上にもメンソレータムを塗ったのですが、結局、翌朝、ひりひりとまぶたを腫らして目を覚ましました。

何日かたつた午後、だいぶ上達した自転車に乗ってしんちゃんのお墓に行ってみました。

小さなお墓の前で、名前を呼んだり、「おい、起きろ」「あそぼ」なんて声をかけてみたりしたのですが、何の返事ありません。お墓はお墓。

「もういないよ」

背中に声をかけられて、驚いて振り返ると、どこかのお婆さんが私を睨んでいました。

いたずらを見つけたような気持ちになって、あわてて自転車へ戻り、こぎ出してから気づきました。そのお婆さんが、坂田のお婆あだったことに。

いまではあの地方も、みな火葬になったそうです。お墓も自動車部品工場になってしまったとか。高校を卒業してからの私は、結局、母も父も選ばず、一人で暮らしはじめましたから、風の便りに聞くばかりですが。

そういうわけで、私は自転車に乗れるようになりました。いまでは二人の子どもを前と後ろに乗せ、ハンドルの両側にスーパーの買い物袋をさげて走る。そんな芸当も朝飯前。しんちゃんのおかげです。あれから誰かの自転車の後ろに乗ったことは、一度もありません。

オートバイだけは別。夫はわが家の三匹の猫よりオートバイのほうが可愛いという人で、ときどき言いわけがわりに私をタンデム（注：ここでは二人乗りをすること）に誘うのです。

もういい年なんだからやめたら、と呆れ顔をしても、バイクでコーナーを攻めていると、生と死のはざまを垣間見るような気がする、なんて偉そうなことを言つて。⑬ なんにも知らないくせに。

「しっかりつかまつてろよ」夫が言います。

答える私。

「がつてんしようたくん」

「なんだそりゃ」

「なんでもない」

それは言えません。約束だから。

問1

①「私の胸もざわざわ、ゆらゆら」とは、「私」のどのような状態を表していますか。次の説明文の **a** に当てはまる語として適当なものを、本文11～12ページよりそれぞれ漢字2字で抜き出し、答えなさい。

「私」が自転車の荷台に乗って、灯の見えない田舎道を行く中で、得体の知れないものに対する **a** な気持ちを抱き、自分のとった行動について **b** している状態。

問2

②「その頃の私はそれこそ、自分がどこへ行こうとしているのかもわからず、人の自転車の後ろに乗っているようなものだったのですから」とありますが、次の説明文の **a** ～ **d** に当てはまる語として適当なものを後からそれぞれ選び、(ア)～(コ)の記号で答えなさい。

「私」が自転車に乗れなかった理由は二つあります。一つ目は、「私」が **a** だったからです。二つ目は、「私」の持っていた自転車に、「私」と母のもとを去っていった父親からの贈り物だったからです。「私」は、自分がその自転車に喜んで乗ることで、母親に悲しい思いをさせるのではないかと子どもなりに **b** していました。当時八歳の「私」は、両親の **c** という大きな問題を前に「人の自転車の後ろに乗っているようなもの」、すなわち、自分の身の振り方を自分の **d** で決定することができない状態にあったのです。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| (ア) 不信 | (イ) 意志 | (ウ) 素質 | (エ) 不和 | (オ) 期待 |
| (カ) 病弱 | (キ) 幼少 | (ク) 非力 | (ケ) 思案 | (コ) 技量 |

【問3】——③「水のあわ」、——⑪「大目玉」、——⑫「朝飯前」とありますが、言葉の意味として適当なものをそれぞれ選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- ③ 水のあわ
- (ア) 無効になる
 - (イ) 無駄になる
 - (ウ) 無用になる
 - (エ) 無関係になる
- ⑪ 大目玉
- (ア) ひどく叱られる
 - (イ) 激しく泣かれる
 - (ウ) とても驚かれる
 - (エ) 大いに呆れられる
- ⑫ 朝飯前
- (ア) よくあることだ
 - (イ) いつものことだ
 - (ウ) たやすいことだ
 - (エ) 目新しいことだ

【問4】——④「なにがあっても不思議はないのです」とありますが、「私」やしんちゃんが住んでいたのはどのような場所だと考えられますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 古い習慣が受け継がれていて、迷信じみたことが真実味を帯びて語られるような場所。
- (イ) 各々の家に伝わるまじないを執り行わないと、死者に呪われると信じられている場所。
- (ウ) 人々が昔からあるほこりに祈ることで、死んだ者をよみがえらせることができる場所。
- (エ) 死者と寄りそうことを村のおきてとしているため、家の近くに墓が作られている場所。

【問5】A・Bに当てはまる語を次の中からそれぞれ選び、(ア) (イ) (オ) の記号で答えなさい。

- (ア) ヘビ
- (イ) エビ
- (ウ) カメ
- (エ) カエル
- (オ) キンギョ

【問6】C・D・Eに当てはまる文を次の中からそれぞれ選び、(ア) (イ) (オ) の記号で答えなさい。

- (ア) しんちゃんが死んだという知らせを聞いたのは、先週の土曜日
- (イ) しんちゃんが生き返ったことに気づいたのは、先週の土曜日でした
- (ウ) 先週の金曜日には、坂田のおばあが生き返ったことを知ったのです
- (エ) 先週の木曜日、こっそりおたま池に行った私たちは、池に落ちて溺れてしまったのです
- (オ) 先週の木曜日には、その杉の橋を渡りはじめて、たった三メートルのところであつてしまいました

【問7】——⑤「わかっていました」とありますが、このときの「私」のどのような思いが示されていますか。もつとも適当なものの中から選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 病気が治って健康になると、しんちゃんとはもう会えなくなってしまうと思っていた。
- (イ) しんちゃんとの直接的なかわりは、もう長くは続かないということに気づいていた。
- (ウ) 自転車の荷台は荷物を置くところで、人を乗せてはいけなところだと理解していた。
- (エ) 幼い頃から長く思っている病が、少しずつ快方に向かっていることを感じとっていた。

【問8】——⑥「わたしも震える声でいっしょに歌いました」とありますが、このときの「私」のどのような思いが示されていますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) しんちゃんの手がもげそうであることを気持ち悪く思いながらも、元気づけてあげようと思った。
- (イ) しんちゃんは声が出なくなるほど疲れているのだと気づいて、せめて歌うことで励まそうと気遣った。
- (ウ) しんちゃんも「私」と同じような心情であることがわかって、恐ろしさとともに紛らわせようとした。
- (エ) しんちゃんは「私」と歌えなくなることを悲しんでいると気づき、「私」も同じ思いだと伝えようとした。

【問9】

⑦「私は黙って首をかしげました。うまく答えられなかったのです。どんぐりを数えるのに忙しかったし、——」
 「なんと答えていいのか迷ってから、最初に思いついた言葉を口にしました」とありますが、このときの「私」のどのような様子が示されていますか。次の説明文の a b c d に当てはまる語句として適当なものを後からそれぞれ選び、(ア)～(ク)の記号で答えなさい。

普段のありようとは打って変わって、しんちゃんは、突然「私」に「ごめんな」と言いました。溺れるしんちゃんが、「私」の足にしがみつき、「私」も溺れたことについて、何も言えなかったことに a のかもしれません。詫びて心の荷が下りたのか、しんちゃんは「死にそうになったとき」のことを「私」にたずねます。「私」が質問に答えられなかったのは、死にかけたときの記憶が b からでしょう。また、どんぐりを数えることに集中し、答えを避けるように見える「私」からは、死者であるしんちゃんから「死」について問われることに c 様子も読みとれます。しかし、生死の境目でしんちゃんが「私」を呼ばなかったことを聞いて、「私」は「ありがと」と言いました。この言葉には、今生きていることに対して「私」が素直に d 様子と、しんちゃんに対する感謝とが表れていると言えるでしょう。

- (ア) 喜んでいる (イ) 驚いている (ウ) 不明確である (エ) 心配りをする
 (オ) 心残りがある (カ) 分散している (キ) 心配している (ク) 戸惑っている

【問10】

⑨「だけど、もう怖くありません」とありますが、どのような理由が考えられますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) しんちゃんは自分が死んでいることを隠して、「私」が怖がらないように気を遣ってくれたから。

- (イ) しんちゃんは生前と比べると性格に多少の変化はあったものの、外見は変わっていなかったから。
 (ウ) しんちゃんと「死」について話せたことで、二人のあいだにあったわだかまりが解消されたから。
 (エ) しんちゃんに関わる不可解さが消えて、あるがままのしんちゃんと向き合えるようになったから。

【問11】

⑩「なるべく明るい声で私は言いました」とありますが、このときの「私」のどのような様子が示されていますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) しんちゃんの素朴な問いかけに対して、できるだけ誠実に向き合おうとしている。
 (イ) 実現性のとほしい会話にうんざりしながらも、しんちゃんを励まそうとしている。
 (ウ) どんな状況も笑い話にしておもうとするしんちゃんに、いささかあきれている。
 (エ) 無邪気な提案に対して、しんちゃん同様に子どもらしく振る舞おうと考えている。

【問12】

F に入る「私」の発言として、適当なものを本文中より抜き出し、答えなさい。

【問13】

⑬「なんにも知らないくせに」とありますが、「私」のどのような思いがこめられていますか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 幼少の頃、「私」には、死ぬまぎわの友だちと遊んだ経験があるということを、現実的な考え方をする夫が信じると思えない。

(イ) 死んだ友だちといまも交流を続けている「私」にとって、夫の考える死の世界は、実際の姿からかけ離れたものだとしか思えない。

(ウ) バイクで体験できるのは、「私」が知するような本当の「生と死のはざま」ではないということに、今後夫が気づくとは思えない。

(エ) 「生と死のはざま」を経験した「私」から見ると、夫の発言は気がきいているようでいて、その実、薄っぺらなものにしか思えない。

【問14】

次の説明文を読んで、 a f に当てはまる言葉として適当なものを後よりそれぞれ選び、(ア)～(コ)の記号で答えなさい。

大人になった「私」は結婚し、二人の子どもを育てています。「私」は、自転車を自在に乗りこなし、たまに夫のバイクで二人乗りをするほど、以前と比べて活動的に、また元気に生活しています。「私」は、かつて「私」が抱えていた a から自由になったのです。しかし、ふと、幼い「私」に不思議な体験をもたらしたしんちゃんに関する記憶がよみがえります。

「私」が八歳だった時のある晩、しんちゃんは「私」を訪ねてきて、おたま池のほとりに誘いました。結局、ほころには何もいなかったことを確認したあと、二人は溺れた日の話をします。ここで、しんちゃんの b が明か

されます。しんちゃんは、自身が泳げないばかりに「私」をも溺れさせてしまったことについて、「私」に謝りに来たのです。謝罪が済むと、しんちゃんは自身の臭いを気にし始めます。

「私」は、そんなしんちゃんを前にして、「しんちゃんはしんちゃん」だと思えます。「死」と隣り合わせに生きる「私」にとって、しんちゃんは生きることの楽しさを教えてくれる相手です。「私」が、しんちゃんの身体に湧く蛆虫を愛情をもって取り除く場面からも、しんちゃんは c であることがわかります。

しんちゃんとの一夜の冒険で、「私」は大きく変わりました。しんちゃんの最後の言葉に従って、翌日「私」は自転車の練習をし、夕方には乗れるようになりました。自転車に乗れるようになったことで、「私」は、「自転車に乗れないほど病が重い自分」ではなくなりました。また、しんちゃんという死者の存在を、生前と変わらずに受け入れられたことで、それまで「私」において d は、「生」と隣り合わせのものと捉えられるようになったと言っても過言ではありません。それゆえ、「私」は、一人でしんちゃんのお墓を訪れて、 e を望むのです。

しんちゃんという死者との一夜の交流は、「私」にとって、 f となりました。「私」は死者によって死の影にとりつかれた生活から解放されたのです。だからこそ、「私」は、生きる上での基点であるしんちゃんとの思い出を大切にしておしみ続けるのです。

(ア) 「死」への切実な欲望

(イ) 「私」に会いに来た理由

(ウ) 「私」が生きる上で大切な存在

(エ) しんちゃんと再会するという夢

(オ) 生きることを楽しみ味わう原点

(カ) 自身の身体や父母の関係への不安

(キ) 友人関係や家族関係に対する不安

(ク) 「私」に打ち明けないでいた秘密

(ケ) 「生」の対極にあったはずの「死」

(コ) かなえられるはずのない死者との再会

【出典】

I

石黒浩「信じること」(『糞袋 の内と外』朝日新聞出版、二〇一三年)より。

II

萩原浩「しんちゃんの自転車」(『短編工場』集英社文庫、二〇一二年)より。ただし、一部省略した箇所がある。

国語

二〇一六年度
第一回

解答用紙

I

問 1	a
	b
	c
	d
	e

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8	④
	⑤

問 9

問 10

II

問 1	a
	b

問 2	a
	b
	c
	d

問 3	③
	⑪
	⑫

問 4

問 5	A
	B

問 6	C
	D
	E

問 7

問 8

問 9	a
	b
	c
	d

問 10

問 11

問 12

問 13

問 14	a
	b
	c
	d
	e
	f

このらんは何も書かないこと

受験番号

氏名